

最優秀賞受賞作品

『家の灯り』

佐野 由美子

野良猫のリユウは、夕暮れが夜になっていく時間が好きです。たくさん並んでいる人間の家々に、ひとつ、またひとつ……と灯りがともっていくからです。どの家にも窓があつて、そこから灯りがもれています。窓辺のカーテンの色に染められて、灯りはいろいろな色に変化します。その様子は、まるで夏の夜の花火大会のようで……。リユウはそのひとときだけ、おながが空いていることも忘れて穏やかで優しい気持ちになるのでした。

くる日もくる日も家の灯りを眺めていたリユウは、ある日「あれっ？」と首をかしげました。――軒だけ、ずっと灯りのつかない家があることに気付いたのです。気付いてしまうと、気になって仕方ありません。次の日も、その次の日も、そのまた次の日も……

「ああ、やっぱり今日も灯りがつかない。」

——もう我慢ができません。リユウは、たつと走り出しました。シロツメ草の空き地を横切つて、小さなドブ川を何回も飛び越えて。ようやくリユウは、灯りのついていない家へたどり着きました。

大きな石の門。門構えの松。重そうな鈍色のかわら屋根。とても古い家です。リユウは足音を忍ばせて、門の中へ入っていききました。玄関も家の中も

真っ暗で、物音ひとつしません。道の外灯に照らされて、クモの糸がキラキラと光っているだけです。（もうずいぶん長いこと人が住んでいないんだな。）と、リュウは思いました。

「なんだか、家も寂しそうだ。」

小さくつぶやくと、古い家がミシリと揺れました。

「そんなことはないよ。寂しくなんかないさ。私には……思い出があるからね。」

声の主は古い家でした。

「ここには誰も住んでいないの？」

「ああ、そうだよ。空き家っていうやつさ。」

「空き家？」

「からっぽの入れ物ってことさ。でも、そんなことはない。ここも昔は他の家のように、にぎやかだったんだよ。若いお父さんとお母さん、子どもが三人もいてね。毎日泣いたり笑ったり、そりやあ大騒ぎだったものだよ。」

古い家は、次から次へと話をしました。いつの間にか夜はすっかり更けています。

「ああ何年ぶりだろう。こうして誰かと話したのは」
古い家は嬉し^{うれ}そうに笑いました。

「私の名前はゲン。きみは？」

「ぼくはリュウ。ーまた明日も来るよ。」
なぜだかリュウは、そう約束していました。

それから毎日夜になると、リュウはゲンさんの所へ行きました。ゲンさんは、あふれるような思い出を、おもしろおかしく語ってくれました。それはす

べて、ゲンさんに灯りがともっていた頃のお話でした。

でも今は。三人の子どもたちは、それぞれに遠い町へと出ていきました。長いこと二人暮らしをしていた、おじいさんとおばあさんも次々に天国へ行ってしまつて——。もう誰もいないのです。

ゲンさんの語るお話は、まるで線香花火のように儂^{はかな}くて、美しくて。リュウは、いつも少し哀しくなるのでした。

月のきれいな夜のこと。コオロギが鳴く庭で、ゲンさんは言ったのです。

「明日、この家は壊されるみたいだよ。このごろ何人かの人間が見に来ていたからね」と。

リュウは驚いて、息もできない程ショックを受けて、どうしていいか分からなくて——。たっ！と逃げ出しました。

「今日までありがとう、リュウ！」
ゲンさんの声が小さく聞こえてきます。そのあとに続く「さよなら」を聞きたくなくて、リュウは耳をふさいで走り続けました。

——家の灯りが遠くに見える堤防の上で、リュウは丸くなりました。吹いてくる風が、いつもより冷たく感じます。

「これまでだって、ずっとひとりだった。それが、これからもまた続くだけだ。どうってことないよ。」
リュウは、ぎゅつと強く目をつぶりました。そして、家の灯りを見るのはもうやめようと心に決めました。

リュウはしばらく遠くの町へ出掛けました。でも、その町のボス猫に追いかけて、うしろ足をかまれて、またいつもの堤防へ戻ってきました。辺りはうす暗くなってきています。"もう見ない"と決めたのに、つい。いつもの習慣で、リュウは家の灯りを眺めてしまいました。

そして「あっ!!」と叫びました。

家に、灯りがついていたので!! ゲンさんの家です。間違いありません。

リュウは足が痛いのも忘れて、たつと走り出しました。枯れ草の空き地を横切って、小さなドブ川をしなやかに飛び越えて――。

「ゲンさん!!」

リュウは灯りのついた玄関に飛びつきました。

ゲンさんは、見違えるような美しい姿になっていました。クモの巣は取り払われて、そうじもきちんとされています。

「ああ、リュウ! 心配かけて、ごめんよ。壊されるんじゃないかったんだよ。新しくここに住む人が来たんだ」

ゲンさんは照れくさそうに笑っています。

その時、玄関の戸がガラガラと勢いよく開いて、小さな女の子が飛び出してきました。

「うわあ、かわいい猫ちゃん!! 怪我けがしてるよ、お母さん。」

女の子は、あつという間にリュウを抱きしめて家中へ入っていきました。

ずっと、ずっと長いこと、遠くから眺めていた家の灯り。その灯りの中へ入ったのは初めてでした。中へ入ったので、灯りは目には見えなくなりましたが――。そのかわりに、リュウの心の中がほんわり温かくなるのが分かりました。

飼い猫のリュウは、夕暮れが近付くと、そわそわと家を出ていきます。野良猫だった頃に住んでいた堤防へ行つて、家々の灯りを眺めるためです。

「早く帰ってくるんだよ。」
ゲンさんが優しく声をかけます。

リュウは草の上に座つて、ひとつ、またひとつと灯つていく灯りを見つめます。

「あつ！ ついた！」

ゲンさんの家に灯りがともりました。リュウは、すくつと立ち上がりました。今からあの灯りの中へ帰つていくのです。小さな小さな幸せの灯りの中へ――。

「早く行こう。みんなが待ってる。」
リュウは、たつと走り出しました。